

## 新たな地域観光デザイン



土屋 芳春 (一般社団法人軽井沢観光協会会長) 松田 智生氏 ((株)三菱総合研究所 主席研究員・チーフプロデューサー)

当協会は軽井沢の気候や自然環境を鑑み、観光ビジョンに“ウェルネス・リゾート”を掲げ、本年信州大学との連携により研究も進めています。このビジョンを上位概念に定めることにより、選択される地域としての確立を目指しています。このような気候効果もあり、当地ではノマドワーカー(※1)やフリーランスなどが増えています。さらに、デジタル技術に慣れ親しんでいるZ世代(※2)の社会進出は、大きな地殻変動を起こす予感もあります。軽井沢は現在、ホテル・マンションや住宅建設が活況で人口の増加もあることから、今後、この社会流動化における観光戦略としての対応が求められています。

この度、社会の流動化に詳しい三菱総研の松田氏に、これからの社会予想・人々の価値の変化・選択される地域の要素などを、軽井沢の環境や風土を踏まえつつ示唆をいただきます。

(文中敬称は略させていただきます)

(土屋) 近年、人々の価値観やライフスタイルの変化が顕著ですが、軽井沢の社会性はいかがですか。

(松田) コロナ禍をきっかけに価値観や働き方が変化しています。弊社も若い世代を中心に全国で10数名が地方移住しています。一方、逆参勤交代(※3)という期間限定型のワーケーションには期待があり、特に首都圏からのアクセスや自然に囲まれた軽井沢は、魅力的なビジネスパーソンや文化人が多数集まっていることが立地的優位性となっています。地域に行く理由(必然性)は、やはり交流です。軽井沢は魅力的な人が多く、都市人材との周波数が同じなので安心感があります。一方サロンの文化面も重要で、貴関係団体共催のイベントでは、私の講演の後に世界的な若手音楽家による演奏会がありました。このような時間や機会を日常的に創出できる地域は他にはみつかりません。

(土屋) 人口減少の一方、健康的な高齢化が地域に関わりをもつことに注目が集まっています。軽井沢がCCRC(※4)への可能性はありますか。

(松田) CCRCのようなリタイアメント・コミュニティは米国の温暖な場所のイメージがありますが、私が訪問したCCRCは冬にマイナス20度になるような町でも、平均年齢は84歳、約400人の高齢者が元気で暮らしていました。居住者は東部の美しい四季を楽しめること、近隣のダートマス大学等との生涯学習や音楽、芸術などの共有に魅力を感じているようです。正に軽井沢の将来像にも同化できるかもしれません。

(土屋) 軽井沢はサービス都市であり、リアルな対面が付加価値を生み現代まで紡いできました。現在、ホテルの開業等が相次ぎ、市場性は高いものの人材不足等の観光課題があります。

(松田) 人材不足は全国共通の課題です。人口が減少する日本で都市と地方、あるいは地方同士での人材の争奪は不毛で、これからは人材の共有です。逆参勤交代の理念は、都市と地方で人材共有による地域活性化であり、地方での副業や兼業を広げることで地方の担い手不足を解消する。つまり都市と地方における

人材共有という新たなシェアリングエコノミーです。マーケティング・営業・IT・財務・SDGsの専門家、あるいは草刈りや収穫の肉体労働でも、逆参勤交代による人材共有で解決できるはずですが。

(土屋) 提唱されているプラチナ社会構想を絡めた軽井沢の可能性はいかがですか。

(松田) 弊社で提唱する「プラチナ社会」は、シルバーのように錆びることがなく、プラチナのように輝きを失わない上質な社会であり、多世代のための成熟した社会と定義しています。日本は今、課題山積みの課題先進国となっていますが、軽井沢が世界に先駆けて、高齢化・移動交通・脱炭素・未来人材育成等の課題を解決することで、プラチナ社会を達成する課題解決先進地になるチャンスがあります。ダボス会議では「最先端の経済を知りたければダボスに行け」と称されますが、軽井沢は課題解決の先進地として、「最先端の地域の課題解決や未来図を知りたければ軽井沢に行け」となるように、将来軽井沢は東洋のダボス

を目指すべきでしょう。

(土屋) 老若男女集う軽井沢ですが、次代につなげるためには特に若年層の市場開拓が必要です。

(松田) 若年層の消費額は限定的ですが、彼らはエンタリー層でもあります。20代から70代以降のライフスタイルに合わせた楽しみ方が軽井沢は可能です。学生時代の思い出の土地がずっと続くような質やブランドイメージが提供できるはずですが。

(土屋) 地域課題には人材育成と集積が上げられますが、サービス業の未来についてお願いします。

(松田) 軽井沢は、ISAKや風越学園など新たな教育の場が誕生し、軽井沢高校も独自色を模索しています。さらに大学のセミナーハウスや企業の研修と連携したワーケーションによって人材育成の拠点になり得ます。私は教育はこれから最大の成長産業になると考えています。軽井沢は観光だけでなく教育産業と人材育成の先端

地になるチャンスがあります。●イノベーションは、同じ顔ぶれ・決まった序列・同質な社内文化からは生まれません。軽井沢で全国の異質なビジネスパーソンと交流し、新たな気付きを得て、非日常空間の中で化学反応が起こるはずですが。

近年注目されるワーケーションですが、私はバケーション型のワーケーションは、第二のプレミアムフライデーになりかねないと反対です。せっかく軽井沢に来るのであれば、軽井沢の人々と交流するコミュニケーション、軽井沢で学ぶ●エデュケーション、軽井沢に貢献する●コントリビューション、軽井沢で事業創造をするイノベーションという軽井沢らしいワーケーションに期待しています。

(土屋) 松田氏との対談から、軽井沢の未来予想ができます。先賢が“屋根のない病院”と謳った、標高1000mのウェルネス気候を生かした教育・芸術・文化発信都市として、

観光ビジョンを基に、その環境が創造力や感性等向上の期待と立地も含め社会の注目度が高くなっています。また、Society5.0(※5)時代に向けた次世代型都市デザインの可能性が高まります。松田氏提案のように、東洋のダボス(MICE推進/ビジネス市場開拓・研究/学術機関誘致/上質なアクティビティ/サービスの提供/人流/人脈の形成)としての先進都市になる可能性があります。しかし軽井沢の本質は、産業や経済だけではない自然・歴史・文化等に守られた、真に豊かなライフスタイル(ライフバランス)が得られ、別荘から派生したサロン文化等のコミュニティが根底にあることです。都市デザインとしては高度な難しい課題であり関係機関等との調整の必要性がありますが、当協会も新たな視点が求められています。



丸の内プラチナ大学逆参勤交代コース



- (※1) ノートパソコン・スマートフォン・タブレット端末などを使い、Wi-Fi環境のある喫茶店やコワーキングスペースなど、通常のオフィス以外のさまざまな場所で仕事をする人。
- (※2) 1990年後半から2000年代に生まれた人を指す。Y世代(80~90年代ミレニウム世代)の次世代という名称。物心ついたときからデジタル技術の発達があり親しんでいる点が特徴。Webによる情報収集・SNSでのコミュニケーションなど、ライフスタイルの中心にデジタル技術が存在している。
- (※3) 都市部社員の地方での期間限定型リモートワークで、働き方改革と地方創生の同時実現を目指す構想。個人のワークライフバランス、企業の健康経営、地域の担い手不足解消やローカルイノベーションという個人・企業・公共の“三方よし”が期待される。
- (※4) Continuing Care Retirement Communityの略称で、高齢者が健康な段階で入居し、継続的なケアを受けながら「ずっと楽しく暮らせるまち」として、終身で暮らすことができる生活共同体。全米で約2千ヶ所、約70万人が居住。
- (※5) サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させ、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会。狩猟社会(Society 1.0)、農耕社会(Society 2.0)、工業社会(Society 3.0)、情報社会(Society 4.0)に続く新たな社会を指すもの。

- イノベーション=新思考や新技術によって新価値を生む革新や刷新・変革
- エデュケーション=学び・教育
- コントリビューション=貢献・寄付・出資

### 松田 智生 氏

(株)三菱総合研究所 主席研究員・チーフプロデューサー

1966年東京生まれ 慶應義塾大学法学部卒業 専門は地域活性化、アクティブシニア論 高知大学客員教授、政府日本版CCRC構想有識者会議委員、内閣官房地方創生×全世代活躍のまち検討会委員、内閣府高齢社会フォーラム企画委員、石川県ニッチトップ企業評価委員、浜松市地方創生アドバイザー、壱岐市政策顧問等を歴任 著書として「明るい逆参勤交代が日本を変える」「日本版CCRCがわかる本」